

「医師国家試験予備校MEC 塩沢昌英先生 (Dr.一茶) による講演会をお聞きして」

—演題:2011年医師国家試験の対応について—

医学科同窓会 会計 屋 良 さとみ (5期生)

(感染症・呼吸器・消化器内科学 (第一内科) 助教)

去る平成23年5月20日18時より、琉球大学医学部医学科教官向けの上記講演会が開催されました。本講演会は、琉球大学医学部医学科学生向け講演会のために来沖されたMECの塩沢先生が(医師国家試験対策のエキスパート)、教官向けにも時間を作って下さったものでした。

今回の講演会は一昨年に続き二回目で、前回よりも参加された先生方が増え、基礎系・臨床系講座、中央診療部等の計23講座、教授7名、准教授4名を含む31名の教官・先生方が参加され、多くの質問も出て、国家試験に対する教官の先生方の関心の高まりが感じられた講演会でした。

総括すれば『臨床実習でしっかりと見聞を深め、また現在の傾向に沿った病態生理の基本的学習と過去問題の演習を行うことで国試に合格することができるだろう。』とのメッセージでした。

“一昔前の医師国家試験体験者”である私達の時とは、かなり異なる状況で現在の国家試験は行われてお

り、詳細に分析することで様々な対策がとれること、また様々な対策をとらないといつまでも“医師国家試験合格率アップ”には繋がらない可能性があることをひしと感じました。

- ① 以前医師国家試験が二日間であったのとは異なり、現在は三日間であるため、“一夜漬けの徹夜”で乗り切れるものではなく、問題数も多く、三日間持続する健康管理から精神状態管理(問題の出来不出来で途中落ち込んでしまうと、その後の回答に影響が出る)、気力・やる気・集中力の維持(三日目の最後にマークミスが多い)等、“正解を回答する”という本来の目的以前の問題がまず山積している。
- ② 問題全体の傾向として、以前よりもかなり“臨床的・応用的問題、最近のトピックス”からの出題が増加し、記憶力で解けるものだけでなく、病態生理に基づいた絶対的知識量の増加、プライマリ・ケア重視の問題、治療の基礎と基本手技、各科の枠を超えた問題などが増えている。

